

ゴリラとヒトとのよい関係

黒鳥英俊（上野動物園 飼育課）

動物園で飼育されているゴリラとその飼育係とのよい関係とはどんなものでしょうか？一言でいうと、それは人間関係と同様にお互いうまくコミュニケーションがとれていて、強い信頼関係で結ばれているといったことかもしれません。もしこの関係が崩れたなら、ゴリラたちの精神的ストレスも大きく、飼育管理できなくなり、私たちが近づいただけでもぶつかってきたり、エサや糞を私たちに投げて観客の前にも出してくれないでしょう。そうなっては仕事どころではなくなります。私たちにとっても彼らと良好な関係を常に保ち、そしていつもかれらの身になって考え、飼育していくことが飼育係の鉄則となっています。

ゴリラはチンパンジーやオランウータンと並び、とても頭のいい動物です。性格は外見に似合わずとてもデリケートでちょっとしたことですぐに下痢をしてしまいます。上野動物園には現在、8頭(オス2・メス6)のゴリラが飼育されていますが、過去に10頭が飼育されていました。最近ではゴリラたちの多くは共同繁殖ということで、他の動物園から借りてきているものが多いのです。彼らを観察してみると、一頭一頭とても個性豊かで、ヒトになれているもの、神経質なもの、おっとりとしているもの、ひとりを好むものなど育った環境に随分と左右されているようです。

私を含めどの飼育係でも初対面のときは緊張があります。そして動物園のゴリラでさえも私たちの方をなかなか認めてくれません。飼育係も子どもの頃から面倒を見ていると当然、信頼関係も強いのですが、人事異動で成獣のゴリラの担当になった場合などは大変です。それにゴリラは飼育係をどうもランクづけしているようで、彼らはよく見ていて、先輩の飼育係の言うことはかなりきくのですが、新人の言うことはここまでするか、当初はまったく耳をかさず、逆にバカにしてわざと悪ふざけをしてからかい反応をみえています。当園のように新しく来たゴ

リラを飼育する場合もゴリラとヒトの駆け引きあり、お互い理解し合うまでヒトによって数ヶ月から数年の期間がかかるようです。

さらに、ヒトとの関係を見ると、この信頼関係は飼育経験だけではないようです。ゴリラもヒトと同様に、好き嫌いの相性があるようで、それは飼育期間がそれほどなくても、すぐに友好的な関係になれる係員や長いこと担当をしても相性が合わなかったりということは個々のゴリラとの間でも時々あります。ある動物園ではゴリラとの相性がまったく合わずにやむなく担当替えになるといったこともありました。また当園では、男性と女性、子どもと大人、動物園関係者と観客などによってゴリラたちの行動にも変化が見られています。今まで当園にいたゴリラたちをみると、体重200キロもあるオスのゴリラは女性飼育係や細身のか弱い男性にはあまり敵対心をもたず、おとなしいのですが、体のガッチリとした大柄な男性に対しては、姿が見えただけで興奮し糞やエサを投げたり、フェンスに力強くぶつかって威嚇してきたりすることもありました。逆に年輩のメスのゴリラは女性係員によくいやがらせをしたり、男性飼育係には好意的なゴリラもいます。また、おもに小さい子どもに対して威嚇行動をとるゴリラもいます。

ゴリラのメスはヒトと同じく毎月メンスがあり、次のメンスとのちょうど間ぐらいに発情がきて、2から3日続きます。当園ではメスの2頭がこの発情期に特定の男性飼育係にのみ発情行動を行うことが報告されています。側に女性がいても見向きもせず、過去の例からもいつも男性だけだということはかなり性別を意識していると思われます。

このようにヒトと行動を比較してみても、かなりストレートに反応がかえってくるのが多くみられます。ゴリラはとても頑固な一面もあっていて、納得するまでかなりの時間もかかります。それとヒト以上によく私たちが観察して

おり、飼育係によって接し方や反応をかえています。担当者のちょっとした顔の表情や態度を読み取ったりするのはとても得意です。次の日に治療のため麻酔をかけなくてはならなくなったり、夕方用があって早く帰らなくてはならなくなったりなど急に部屋に戻ってこなくなることもたまにあります。毎日の挨拶の掛け声や長靴の足音やカギの音、作業の順番が入れ替わったりといったすこしの変化でもゴリラはすぐに読み取ってしまい、ぞっとすることもあります。

毎日の飼育のなかでも、冬の寒い朝などビデオでは元気に動き回っていたゴリラを外に出そうとすると、わざと風邪をひいたように寝込んだ行動をとって外出を拒否したり、雨の日などは空を見上げて、嫌がりすぐに部屋に戻ってきたり、外の放飼場から石を隠し持ってきたり、部屋の遊具のボルトやナットをとったりと知能犯的なことをすることがあります。

毎日飼育していて、彼らとのよい関係を継続するにはどうしたらよいか。常に私の頭を過ぎります。彼らは飼育係に対し、自らの欲求のため、エサをじゅうぶんにもらい、私たちから常に束縛や監視されたくないと思っているのかもしれない。また、何か不安なことがあったら、いつでも助けてくれるヒト、暇なとき遊び相手になってくれるヒト、そのような存在、むしろ逆に私たちが飼育されているような存在なのかもしれません。ゴリラの飼育で気をつけているのは、ゴリラはオスメスともとてもプライドが高く、特にシルバーバックと呼ばれる成獣のリーダーオスとは友好関係を保ち、あまり恥をかかせないよう注意をしています。また、飼育係が完全に彼らの上に位置するということは、ゴリラにとっても良くないことです。

最近では、動物園も大きく変化をみせています。新しい施設はランドスケープ・イマージョンという生態的展示が主流で、土や樹木を取り組み、自然に近い放飼場を再現しています。それには動物に十分なスペースと観客から隠れる

ことが出来る場所がもうけられていることも条件です。管理面でもアニマル・エンリッチメントという言葉がそのまま使われていますが、動物に退屈せず毎日の生活が満足のいくよう過ごしてもらえるような工夫が、欧米の動物園を中心に進められています。当園でもいち早くこれらの動物の福祉を考えた施設が作られ、その第一号が彼らの住む「ゴリラの森」です。

昨年、アメリカのアトランタ動物園とジョージア技術研究所で教育プログラムの一環として、子供向けにゴリラと慣れ親しんでもらえるよう、ゴリラのバーチャル体験ということで、観客がゴーグルをかけ子どものゴリラになって動物園のゴリラの中にはいり、ゴリラの動作や反応、行動を疑似体験できる装置を開発したのがまだ昨日のような記憶で残っています。それが二次元的なものから三次元的なものになった場合の「実物」の脅威ですが、ゴリラのような高度なコミュニケーションを必要とする行動の複雑な動物のロボットは遠い将来できるのだろうか？昔のキングコングは明らかにゴリラというよりサルに似たぬいぐるみでしたが、最近の映画で出てきたダイアン・フォッシーの「ゴリラ・イン・ザ・ミスト」のゴリラのデジットや「マイティ・ジョー」は実に良く出来たぬいぐるみで担当者としても一瞬見ただけでは間違えるほどでした。しかしどんなに精巧でもゴリラにはすぐに見破られてしまうことでしょう。以前、シカゴ郊外の動物園で母親が育てなかった子どもゴリラを飼育係が人工保育するときに、ゴリラのぬいぐるみを着て世話をしていたのがとても印象的でした。これはカリフォルニアコンドルやペンギンでヒナにインプリンティング（刷り込み）させるときにヒトの姿を見せないで育てることを応用したのですが、将来、動物園にまったく無縁と思われているゴリラロボットの育児が登場するのでしょうか？